

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月1日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530790

研究課題名（和文） 幼小連携カリキュラムの開発と実践に関する日米間の比較教育史的研究

研究課題名（英文） The comparative historical study of the development and practices of the kindergarten-primary curriculum between Japan and the United States

研究代表者

橋本 美保（HASHIMOTO MIHO）

東京学芸大学・教育学部・教授

研究者番号：60222212

研究成果の概要（和文）：本研究では、近代日本における幼小連携カリキュラムの理論的背景と実践的特質を明らかにした。アメリカにおいては幼稚園運動に始まった児童中心主義の生活教育の理念がプロジェクト型のカリキュラムとして具現化し、さらにその成果を小学校以上の教育へ取り入れる試みとして進歩主義教育が普及していった。一方、その情報が1920年代の日本に受容されて、いくつかの女子師範学校附属学校園で試みられていたこと、ただし附属小学校側に積極的な導入態勢が無い場合が多く、ほとんどの学校では本来の趣旨は伝わらなかったことなどを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research explored the theoretical background and practical features of the kindergarten-primary curriculum in modern Japan. In the United States of America, the theory of child-centered education concerning life was realized as the project based curriculum. American progressive education began to be popular throughout the whole school system by adopting the fruits of American kindergarten movement. Those facts were informed to the Japanese educators in the 1920s. Some attached schools for women's normal school studied and tried the kindergarten-primary curriculum. Some schools understood the meanings of the programs, but many other schools did not understand the meanings due to their insufficiency in research condition.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：教育史・カリキュラム

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：幼小連携、カリキュラム、進歩主義教育、アメリカ幼稚園運動、生活単元、及川平治、明石女子師範学校、プロジェクト・メソッド

## 1. 研究開始当初の背景

幼稚園と小学校の連携をどう図るかは現実的な問題である。学校現場でしばしば耳に

する「小1プロブレム」も、その原因は保育園・幼稚園から小学校への学習環境の急激な変化にある。幼児教育と小学校教育の連携の強化を図り、なめらかな連続の必要性を重要

視した中央教育審議会は、2005年の答申『子どもを取り巻く環境の変化を踏まえた今後の幼児教育のあり方について』において「生きる力の基礎となる幼児教育の成果を小学校教育に効果的に取り入れる」ことが必要だと指摘している。この答申は小学校教育にも幼児教育の目的やカリキュラムを理解し、その成果を取り入れるように求めており、それを受けて近年、小学校と保育園・幼稚園との相互理解や交流の試みも見られるようになった。もっとも、幼小連携の必要性はかなり以前から主張されており、幼稚園には特に小学校の準備教育の導入が要請されてきた。そのため、小学校に入学後困らないようにと初歩的な言語教育や数的概念の形成、集団生活の訓練を保育内容に取り入れる幼稚園も多く、従来は、幼稚園の側が小学校教育へ近づく形で幼小連絡が図られてきた。その中で、先の中教審答申が提示した「小学校の側が幼児教育の成果を取り入れる」方法による幼小連携は、日本の幼年期教育にとっては画期的な提言と位置づけられよう。

こうした幼小連携の取り組みは、20世紀初頭のアメリカの進歩主義教育運動に始まったと言っても過言ではない。進歩主義、いわゆるプログレッシヴ・エデュケーションは幼稚園運動にその端を発したと言われ、その実験的試行の中から幼小連携のカリキュラムが提案されていたのである（阿部真美子ほか著訳『アメリカの幼稚園運動』明治図書、1988年）。しかし、これまでのカリキュラム研究では、幼稚園は幼児教育の立場から、小学校は小学校教育の立場から、それぞれ別々に研究されており、両者がどのような態勢で、どのようなカリキュラムを開発・実践していたのかを見通す視点が欠落していたと思われる。さらに、アメリカの影響を受けてそのカリキュラム理論や新教育運動の実践を展開した日本においても、いつ、どのような情報によって幼小連携のカリキュラムが受容され始めたのかについてはほとんど検討されていない。

## 2. 研究の目的

本研究においては、近代日本における幼小連携カリキュラムの到達点とその限界を明らかにすることを目的とした。そのために、まず欧米に興った幼小連携カリキュラムの理論的背景とその実践的特質を把握することを目標にした。日本にもたらされた幼小連携カリキュラムや実践の情報が、当時のアメリカの教育界の中でどのような位置にあるものであったのかをまず明らかにし、それがどのようにして日本にもたらされたのかという受容のプロセスを解明することを試みた。

## 3. 研究の方法

本研究は、近代日本における幼小連携カリキュラムの到達点とその限界を明らかにするために、アメリカの進歩主義幼稚園運動の中から生じた幼小連携カリキュラムがいわゆる大正新教育という名のもとで日本に受容されていく過程を比較教育史の手法を用いて明らかにすることを試みた。

研究期間を通して、日本とアメリカにおける幼小連携カリキュラム開発の実態とその普及に関する史料調査を実施した。海外調査と国内調査を並行して行い、両国における幼小連携の理念とその内容がどのように提起され、普及していくのかについて、そのプロセスを明らかにした。

そのため、アメリカにおいては19世紀末頃から起こった幼小連携の理念とその具現化過程に関する先行研究および一次史料発掘のために、シカゴ大学、メリーランド州立大学、ハワイ大学の各附属図書館を訪れて史料調査を実施した。また、大正期に日本へ流入したアメリカの幼小連携情報とカリキュラム開発に関して、国内において以下の事項に関する実態調査を行った。

- (1) 大正期の初等教育関係雑誌にみられるアメリカの幼小連携に関する紹介記事の内容調査
- (2) 文部省の幼小連携に関する外国事情調査の実態
- (3) 下記の師範学校附属小学校と附属幼稚園における幼小連携の実態に関する事例調査
  - ・東京女子高等師範学校
  - ・奈良女子高等師範学校
  - ・明石女子師範学校
- (4) 師範学校附属小学校と幼稚園におけるカリキュラム開発の態勢と試行に関する予備調査

上記の史料調査の成果を踏まえ、「アメリカにおける幼小連携カリキュラム思想の生起とその開発過程」と「近代日本における幼小連携カリキュラム情報の受容とその試行過程」とを比較して、国際的な新教育運動の中における日本の幼小連携に関する取り組みの特質を考察した。

## 4. 研究成果

戦前期におけるアメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの受容の実態、およびその定着を阻害した要因について、以下の手順によって比較史的な分析を行った。

(1) アメリカの幼稚園運動における進歩派の改革理論と実践的研究の成果が、進歩主義運動として小学校以上の学校段階に取り入れられたことを明らかにした。そこで開発された幼小連携カリキュラムの特質は、幼小が「プロジェクト」を核とする同一の原理で構成されることであった。また、この原則に基づくカリキュラムモデルは、連邦教育局と IKU (International Kindergarten Union: 国際幼稚園連盟) によって『幼稚園のカリキュラム (1919)』と『幼稚園と第一学年のカリキュラム (1922)』として開発され全米に普及し、日本にももたらされた (5. 主な発表論文等—図書①の第4章)。

(2) 幼稚園運動が進歩主義運動へと発展する過程で取り入れられたヨーロッパの発生心理学の理論が主としてドクロリーの「興味を中心」理論であったことを明らかにした。また、ドクロリー (Decroly, Ovide) の理論はアメリカにおけるプロジェクト・メソッドの開発によって、進歩主義の小学校におけるプライマリー・カリキュラムの開発に影響を与えていた (5—雑誌論文③④)。

(3) 日本にもたらされた幼小連携カリキュラムと実践情報の内容を分析してその特質を明らかにすると同時に、情報をもたらした主体の意図や、情報を受けとった側の理解について考察した (5—雑誌論文②④⑤)。本研究では、特に、明石女子師範学校附属幼稚園および小学校における幼小連携カリキュラムの開発過程の実態を解明した。そこでは、幼稚園主事と附属小学校主事を兼務していた及川平治がアメリカおよびヨーロッパの新教育情報を研究し、訓導達を指導しながら幼小が共同して生活単元カリキュラムの開発を行っていた。また、そこで開発されたカリキュラムはプロジェクト活動を取り入れて展開されることが意図されていた (5—雑誌論文⑤)。

(4) 附属幼稚園と小学校を擁し、同時代に幼小連携カリキュラム開発を行っていた3校の女子師範学校 (東京女子高等師範学校、奈良女子高等師範学校、明石女子師範学校) について、それぞれのカリキュラム開発過程の実態と研究態勢、およびそれぞれのカリキュラムの特質についての比較を行った。その結果、三事例の中には幼小連携カリキュラムの原理を十分に理解できた事例と理解できなかった事例があり、この点がカリキュラム開発の差異を生み出

していたことが判明した。前者においては、カリキュラムの核となるプロジェクトが連続する性質をもつことを理解し、カリキュラム全体を再編成することが目指されていたが、後者においては、プロジェクトを実践の一部に導入することにとどまっていた。また、わが国の場合、幼稚園と小学校でともにプロジェクトの導入に取り組みながらも、既存の制度的枠組みを維持したまま別々に研究を進める傾向が強かったことを指摘した。(5—雑誌論文①)

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ① 遠座知恵・橋本美保「近代日本における進歩主義幼小連携カリキュラムの受容—三校の女子師範学校の研究態勢を中心に—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』査読無、62、2011、7~17頁。
- ② 田中優美・橋本美保「桜井女学校幼稚保育科卒業生吉田鉞の保育思想とその実践—室町幼稚園の保育カリキュラムに着目して—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』査読無、62、2011、19~30頁。
- ③ 橋本美保「及川平治における生活単元論の形成—欧米新教育情報の影響を中心に—」『教育学研究』、査読有、76-3、2009、309~321頁。
- ④ 橋本美保「1920年代明石女子師範学校附属小学校における生活単元カリキュラムの開発—近代日本における単元論の受容に関する一考察—」『カリキュラム研究』、査読有、18、2009、1~15頁。
- ⑤ 橋本美保「明石女子師範学校附属幼稚園における保育カリキュラムの開発過程—アメリカ進歩主義の幼小連携カリキュラムの影響を中心に—」『東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I』査読無、60、2009、39~51頁。

[学会発表] (計3件)

- ① 橋本美保「及川平治のプロジェクト理解と明石女子師範学校附属学校園におけるその実践」幼児教育史学会第7回大会シンポジウム(「保育実践史のなかのプロジェクト」)2011年12月3日、和光大学(東京都)。

- ② 橋本美保「国定教科書を用いた生活単元カリキュラムの開発—西口槌太郎の葛藤と到達点—」日本カリキュラム学会第 21 回大会、2010 年 7 月 3 日、佐賀大学（佐賀県）。
- ③ 橋本美保「近代日本における幼小連携カリキュラムの開発過程—明石女子師範学校附属学校園の研究態勢を中心に—」日本カリキュラム学会第 20 回大会、2009 年 7 月 12 日、神田外国語大学（千葉県）。

〔図書〕（計 1 件）

- ① 田中智志・橋本美保著『プロジェクト活動—知と生を結ぶ学び』東京大学出版会、2012 年、190 頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

橋本 美保 (HASHIMOTO MIHO)  
東京学芸大学・教育学部・教授  
研究者番号：6 0 2 2 2 2 1 2

### (2) 研究分担者

なし

研究者番号：

### (3) 連携研究者

なし

研究者番号：